

広報委員 の一言



映画『フロンタライン』（2025年6月公開）を観ました。

この映画は、2020年2月3日にダイヤモンド・プリンセス号が横浜港に入港した日から、全員の下船が完了する3月1日までの約1か月間を描いています。3,711名の乗客・乗員を乗せた豪華客船の中で新型コロナウイルスの感染が急速に拡大し、事態が日を追うごとに悪化していきます。当時、日本には大規模感染に対応する専門機関がなく、災害医療を専門とするDMATが緊急投入されました。映画では、神奈川DMATの調整本部長・結城医師に1本の出動要請の電話がかかってくる場面から、DMATの関わりが始まったことを印象的に描いています。神奈川県庁内の対策本部で連日指揮をとる結城医師を小栗旬、船内活動を行うDMATのリーダー仙道医師を窪塚洋介が演じています。二人のシーンは、事実に基づき、殆ど船内外での電話でのやり取りです。

映画では、当時あまり報道されていなかった船内のエピソードが沢山描かれています。パニックに陥っている言葉の通じない外国人乗客に対応する医療者・クルーの苦労、夫が搬送され一人客室に残された妻が自ら命を絶とうとする場面などです。

船内からの重症者の救急搬送は、国内の感染症病床が限られていたこともあって、大変な労力を要しましたが、さらに課題だったのが、多くの無症候性感染者や濃厚接触者の受け入れ先の確保でした。その対応として、厚生労働省が開院準備状

態にあった藤田医科大学岡崎医療センターに受入れを要請したそうですが、入院体制が整っていないにもかかわらず、センター側が受諾し、全員下船の収束に向けてようやくメドが立ったのでした。そこで横浜から愛知県岡崎市へ、大型バスで乗客の移送が行われることになります。深夜のバスの中でも発症者が相次ぎ、緊張感に満ちた大変なミッションであったことが分かりました。

上映の2時間は胸が詰まる思いでした。演出は過剰にならず、事実に基づいて淡々と描かれました。監督も「多数の当事者や関係者、亡くなった方、苦しんだ方がいる現実を前に、リアリティを大切にし、誇張や過剰なヒロイズムに陥らないよう心がけた」と語っており、その姿勢が作品全体に貫かれています。

映画に登場する人物の多くには実在のモデルがいます。主人公の結城医師もその一人で、新潟大学出身の私の同級生です（役名は異なる）。後に国内に感染拡大した段階でも神奈川県の調整本部でリーダーとして奮闘し、その姿は時々テレビで紹介されていました。ダイヤモンド・プリンセスでもこんな過酷な立場に置かれていたのかと、改めて驚き、さらなる尊敬の念を抱きました。映画に没頭するうちに、演じている小栗旬が彼そのものに見えていました。1回目を観た後、普段ならあまり買わないパンフレットを手に取り、出来るだけ記憶に留めたいと思い、後日もう一度観に行きました。

（平塚 素子 記）

広報委員会委員：佐藤雄一郎・橋立英樹・勝井豊・高塚尚和・磯部賢論・高野由美子・恩田晃・平塚素子・永井雅昭

新潟県医師会報・第907号〔令和7年10月〕

発行所 〒951-8581 新潟市中央区医学町通2-13 新潟県医師会

TEL：025-223-6381 FAX：025-224-6103

ホームページ：http://www.niigata.med.or.jp メール：kaihou@niigata.med.or.jp

印刷所 〒950-8724 新潟市中央区和合町2-4-18 株式会社 DI Palette
